



化石館だより

コラム

金生山のゴマガイ類

「胡麻粒のように」とか「胡麻粒くらいの」などと、小さいものを表現する場合「胡麻」にたとえることがあります。陸産貝類（陸貝）にも「ゴマ」という名前を付けられた小さな貝がたくさんいます。これらの貝の殻高は、2mm～4mm程度で、まさに胡麻粒のような大きさです。これらの貝類は「ゴマガイ科」としてまとめられており、日本のゴマガイ科は4属に分類され、亜種を含めて50種ほどが確認されています。金生山では、「イブキゴマガイ」「ゴマガイ」「ヒダリマキゴマガイ」という3種のゴマガイの生息が確認されています。

金生山のゴマガイで一番大きなものが「イブキゴマガイ」です。大きいと言っても、殻高4mm、殻径2mmしかありません。でも、ゴマガイとしては大型の部類に入ります。イブキゴマガイは、「イブキ」という名が付いているため、伊吹山山系の固有種と思われがちです。伊吹山にはたくさん生息していますので、私も伊吹山系にしか生息しない貝だと思い込んでいましたが、実は関東から近畿まで広く分布していることを知りました。しかも、模式産地が箱根となっていますので更に驚かされます。イブキゴマガイは、1877年にドイツ人の動物学者マルテンスにより *Diplommatina labiosa* として新種記載されていますが、箱根で確認された種にどうして「イブキ」という和名が付けられたのかはよく知りません。

イブキゴマガイは、石灰岩地を好むようです。金生山では石灰岩の分布している山頂部分や南東部から北東部の山麓にだけ生息しています。「今ではすっかり個体数が減ってしまいましたが、40年ほど前は、雨上がりに金生山に出かけると、山頂の岩巢公園には辺り一面にイブキゴマガイが這いまわっていて、足の踏み場に困るくらいでした。

ゴマガイは、殻高3mm、殻径1.7mm程で、よりゴマ粒に近い大きさです。ゴマガイの仲間は国内各地で見つかり、発見地の名がつけられた多くの種が存在します。なかには非常によく似た種もあり、見分けることが難しいグループです。岐阜市の陸貝調査では、キュウシュウゴマガイが報告されていますが、金生山のゴマガイとの違いは定かではありません。



大きさの比較

左から イブキゴマガイ、ゴマガイ、ヒダリマキゴマガイ

金生山のゴマガイは、西部や北部の石灰岩分布地に隣接した場所で見つかります。特に杉が植えられている場所ではその姿を多く確認できます。杉林の林床は枯れた杉葉が湿度と空間を確保してくれるからか、ゴマガイが生息しやすいようです。金生山では、ゴマガイとイブキゴマガイは生活の場所を分かち合っているように思えます。何ヶ所かで確認していますが、ゴマガイとイブキゴマガイが同じ場所で見つかることはありません。一方、ヒダリマキゴマガイとゴマガイは、同じ場所での姿を確認することができます。

ヒダリマキゴマガイは、その名のごとく左巻の貝です。ゴマガイの仲間は、その多くが右巻きの貝なのですが、ごく一部に左巻きの貝もいて、「ヒダリマキゴマガイ属」というグループにまとめられています。大きさはとても小さく、殻高2mm、殻径1mmしかありません。この貝もイブキゴマガイと同じく1877年にマルテンスによって新種記載されており、模式産地は江戸（上野）となっています。ヒダリマキゴマガイは本州および四国、九州に分布しており、この属を代表する貝となっています。大変小さな貝ですが、拡大して見ると真っ白な貝殻に肋とよばれる筋が美しく入った愛らしい姿をしています。

(文責：高木洋一)

お知らせ

後期企画展

「貝殻の魅力」

～ 不思議な形と美しい色彩 ～



大垣市が所蔵する岩田稔コレクションの中から、特徴のある形と色彩に着目して選出した海産の貝標本を紹介します。貝殻の利用や生態的な特徴など、貝殻に付随した情報も交えて興味深く見ていただけるよう工夫しています。親子連れでも楽しめるよう、微小貝を多く含む海砂から小さな美しい貝殻を拾い出す体験コーナーも併設します。

期 間： 10月7日（土）～1月31日（水）

入館料： 一般100円 高校生以下無料

閉 館： 火曜日・祝日の翌日 年末年始



問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)

Email kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp